様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００１１０

研究課題名（和文）言語学者バンヴェニストの思想：「話す」行為・経験の多面性を考える

研究課題名（英文）Linguist E. Benveniste's thought : multiple aspects of the act=experience of speech

研究代表者
小野　文（ONO, Aya）

慶應義塾大学・理工学部（日吉）・教授

研究者番号：００４１８９４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：エミール・バンヴェニストは1945-1950年にかけて、コレージュ・ド・フランスにおいて制度語彙に関する講義を行っている。今回の資料調査では、この講義の準備ノートのなかに、「話す parler」という動詞、あるいは「言葉paroles」に関する語彙のノートを多数見いだした。発話行為に関する一般言語学的な考察が1960年代後半に深められるという一般的な見方に反して、草稿のなかではすでに1940年代後半から「話す」行為への思索が見られるということである。その思索は、60年代後半に見出せるものよりもはるかに深く、多様な側面を見せている。本研究の成果は、複数の研究論文と一本の学会発表において公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、フランスが生んだ20世紀最大の言語学者といわれるエミール・バンヴェニスト（1902-1976）の言語思想を辿り直し、とくに彼の比較言語学研究の草稿資料を調査・考察することから、それに新しい光を当てようとするものである。中心となるのは、彼が「話す」という動詞をどのような行為として捉えていたか、という問いになる。この「話す」という概念に注目することで、これまで別々のものとして捉えられていたバンヴェニストの一般言語学と比較言語学を繋ぐことができるからである。

研究成果の概要（英文）：Emile Benveniste lectured on institutional vocabulary at the College de France from 1945 to 1950. In our research, we found many notes on vocabulary related to the verb " parler ” (speak)" or “ paroles (words) ” in his preparation notes for this lecture. Contrary to the popular belief that Benveniste’s general linguistic considerations of speech acts deepened in the late 1960s, the manuscript exhibits his thoughts on the act of "speech" already in the late 1940s, and they are much deeper and more multidimensional than those that are found in the late '60s.
The results of this research were published in papers and one conference presentation.

研究分野：言語思想史

キーワード：バンヴェニスト　言語思想　発話行為　言語学の概念形成

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

言語思想史という分野においてエミール・バンヴェニストという言語学者は、とりわけ 20 世紀の人文科学全体に影響を与えた人物として、構造主義以降注目されてきた。20 世紀後半、言語学の対象は、「構造・体系としてのラング（言語）」から「行為としてのランガージュ（ことばとその活動）」にシフトするが、バンヴェニストは「ディスクール」や「発話行為」、また「主体性」といった諸概念を言語学に提示することで、人文科学全体のパラダイム変換に関わったからである。2005 年以降次第に明らかになってきたバンヴェニストの草稿資料の存在も、研究に拍車をかけている。

一方、比較言語学におけるバンヴェニストの仕事は、国内はもとより海外でもあまり顧みられてこなかった。またバンヴェニスト研究は、これまで言語理論や文学理論の専門家が関わることが多く、その研究は「バンヴェニストの一般言語学」内部に留まることがほとんどで、思想史的な見方が取られてこなかったのが現状である。その点で、研究代表者の研究（バンヴェニストの比較言語学の成果を思想史的観点から捉えなおす）は、とくにフランスを中心とするヨーロッパとブラジルで注目されている。

２．研究の目的

エミール・バンヴェニストの思想を人文科学史のなかに位置づけ、その思想の本質にある「話す」という行為・経験の多面性を取り出すのが本研究の目的である。まずは歴史的な視座において、バンヴェニストが同時代の思想から受けた影響を探る。ここでは伝記的事実とともに、バンヴェニストと構造主義、ポスト構造主義との関わり、またナチズムや比較言語学（インド=ヨーロッパ諸語研究）との関係性を検討した。言語思想的な視座では、「話す」という行為を、「話す」ことに関わる動詞から検討し、その多面性を言語学的観点（人称、主体性、行為）と社会学的観点（社会、宗教、法、権力）から照らしだす必要がある。特に本研究では、「人称」「主体性」という観念が、いかにバンヴェニウトの「宗教」「法」制度語彙研究と結びついているのかを示す方針である。

３．研究の方法

方法としては、１）資料収集と、２）読解・研究を、ほぼ同時に進めつつ、少し遅れて３）研究成果を執筆し発表することとした。

１）資料収集

①コレージュ・ド・フランス書庫：バンヴェニストの生い立ちや若い頃の資料を探す。また後年コレージュ・ド・フランスで行った講義の準備ノートを筆写・コピーする。

②パリ国立図書館／リシュリュー館：バンヴェニストの草稿資料のなかでも、比較言語学に関するものを選び、コピーする。とりわけコレージュ・ド・フランスにおいて 1945-1950 年に行われた講義が、「話す」という動詞を取り上げているため、その草稿を調査・収集する。

今回、この資料収集に関しては、途中からコロナ禍の影響を受け、思うように進まず、研究期間を延長する原因にもなった。

２）読解・研究と３）研究成果発表：上記の資料に関しては、100%望んだものが得られたわけではなかったが、読解から得られた成果を主に研究論文と講演の形で発表した（下に詳細を記す）。

４．研究成果

本研究の成果は、研究論文のなかに分散して発表しているが、それをまとめると以下のようになる。

１）従来のバンヴェニスト人称論とは別の思想の存在

バンヴェニストは 1945-1950 年の間にコレージュ・ド・フランスにおいて「宗教」「法」制度語彙の授業を行っており、これが後に出版されることになる『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』（1968）の元になったと言われている。この授業の準備ノート・草稿がコレージュ・ド・フランスとパリ国立図書館に残されているが、今回の成果としては、まずこの資料の掘り起こしを行ったこと、そしてこのなかの資料を読解することで、バンヴェニストが『一般言語学の諸問題』（1966）で見せている人称論やディスクール論とはまた別の思想を覗かせていることを明らかにした。

一般に膾炙されているバンヴェニストの言語論においては、「ことばにおける主体性について」というタイトルが顕著に示しているように、「私」という人称代名詞と話す主体の関係性が彼の人称論の中心とされている。一方、コレージュ・ド・フランスでの講義のなかで扱われた印欧語の《ºbha-》、ギリシャ語の《phēmi》、ラテン語の《for》に関するバンヴェニストの研究は、非人称的、没個性的、集団的で、また神秘的・神的な意味合いを帯びた「話す」行為の在り方を示

しており、話す主体の「私」を中心とする 50 年代後半からのバンヴェニストの人称論からみると異質な思想を形成している。この二つの思想はどのように折り合いを付けるのか、という問題は今後の課題である。

２）「ことばにおける主体性」思想の形成

バンヴェニストの主要な概念といわれる「ことばにおける主体性」という観念がどのように形成されたかを詳細に分析した。特にバンヴェニスト的前置詞表現“dans et par”（～において、また～によって）という表現がどこから来ているのかを調査した。この表現は、バンヴェニストとも親交が深かったコペンハーゲン学派の言語学者たち（イェルムスレウやブレンダル）、また若いバンヴェニストが親しんだ文学者サルトル等が、1930 年代後半から用いている表現である。また 50 年代前半にバンヴェニストが関心を抱いていた精神分析医ジャック・ラカンも、この表現を書き物のうちに用いている。“dans et par”がもつ意味論的な動きは、内部・外部の対立を乗り越える動きを見せることから、次に述べる「中動態」の思想との関連性も指摘しておいた。

３）バンヴェニストの「中動態」概念

「話す」という動詞は、古代インド＝ヨーロッパ諸語においては中動態しかない動詞（メディア・タントゥム）であったとバンヴェニストは「動詞における能動・中動」において短く言及している。この論考は、後にバルトとデリダの論争の元となり、また物語論へと応用されていく重要な論考である。本研究では、この「バンヴェニストにおける中動態」を研究対象の一つとし、なぜ（他の言語学者ではなく）バンヴェニストの中動態概念が、哲学や文学理論のなかで取り沙汰されるのかを、他の言語学者の中動態研究と比較しつつ、分析した。その結果、バンヴェニストの「中動態」概念は、トポロジカルな定義を受けるとみせながら、じつは動的な定義を受けていることを明確にした。

４）精神分析との関わり

本研究で得られた結果として特筆したいのは、バンヴェニストの「ことばにおける主体性」概念と精神分析との関係をより仔細に考察できたことである。エミール・バンヴェニストが言語（langue）と言説（discours）を対比させていく 50 年代、それと並行して「ことば」と「主体性」の関係についての考察も彼のうちで深められているのはよく知られた事実である。しかし実際に「ことばと主体性」の思考がどのように育まれているのかに関しては、「人称」に関する問題圏から、という曖昧な答えしか従来の見方は持ち合わせていなかった。本研究では、まず「ことばにおける主体性について」（1958）に至るバンヴェニストの諸論考の布置を捉え直し、そのなかで「フロイトの発見におけることばの機能についての注記」（1956、以後フロイト論文）が持つ重要性を指摘した。次に、フロイト論文はラカン派の精神分析との出会いから書かれていることを示し、とくに「ローマ講演」を初めとするラカンの書き物からの影響を、フロイト論文やその他のバンヴェニストの論考のなかに拾い出した。最後に、「主体性」等その他のディスクール論の重要概念が、精神分析との出会いという光のもとでは、どのような姿で現れてくるのかを検討した。

５）「話す」という行為の行為主は誰か。

「話す」という動詞／行為の行為主の問題は、バンヴェニスト自身にとってもあやふやにされている部分がある。彼は“sujet”（主語＝主体＝主辞＝患者）という用語や“locuteur”（話し手）、“sujet parlant”（話す主体：ソシュールの用語）、「ことばにおける主体性 subjectivité dans le langage」等の表現を織り交ぜながら、「話す人」の思想を形成しているのである。本研究では、この幾つかの表現がどのような折に出現するのかを検討し、言語のなかの「主語」としての sujet が、1950 年代始めの精神分析との出会いによって、「患者＝主体 sujet」として姿を変えていることを明らかにした。また同じ「話す主体 sujet parlant」は、「人が発話行為をおこなったあとに事後的に現れ、すぐに消えていくような儚いものとして描かれていることを詳述した。主体は最初からあるものではなく、「人が言葉を話す」というはたらきのなかで生まれ、その言葉が終わると同時に消えていくのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小野 文	４．巻 37
２．論文標題 エミール・バンヴェニストの「ことばにおける主体性」--- ある一文を巡って	５．発行年 2023年
３．雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要　人文科学	６．最初と最後の頁 67-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小野 文	４．巻 54
２．論文標題 誰が話しているのか？--- エミール・バンヴェニストの言語思想における異質な「話し手」の相貌	５．発行年 2023年
３．雑誌名 慶應義塾大学 言語文化研究所紀要	６．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小野 文	４．巻 12月号
２．論文標題 言語学者は何語の夢を見るか	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 309-318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Aya ONO	４．巻 VII-2
２．論文標題 Prepositions, verbes pronominaux et voix moyenne --- Un nouveau point de vue sur la subjectivite langagiere d’Emile Benveniste	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Blityri (Edizioni ETS)	６．最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 小野 文
2．発表標題 バンヴェニスト言語学における主体の現れ --- フロイト論文との関わり
3．学会等名 日本フランス語学会春季大会 シンポジウム「バンヴェニストとディスクール論の展開」（招待講演）
4．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

1．著者名 小野文・粂田文（編）	4．発行年 2022年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 261
3．書名 言語の中動態、思考の中動態	

1．著者名 G. Ottavi et I. Fenoglio (dir.)	4．発行年 2019年
2．出版社 Editions Rue d'Ulm	5．総ページ数 290
3．書名 Emile Benveniste, 50 ans apres les Problemes de linguistique generale	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関